母校の思い出

山城20回　福井道子
（旧姓　中村）

山城高校を卒業して三十七年も経ち、まことに月日の経つのは早いものだと実感しています。その間、ずっと山城高校の区域でもある北区に住み続けています。ここ数年で校舎、グランド、体育館と新しくなり、高校時代の三年間、勉強するより長く過ごしたバスケットコートも新しくなり、最近すっかり思いでも遠のいております。少々寂しい気持ちです。

母校の思いでという言葉から即座に頭に浮かぶのは、「休講」「早弁」「バスケットボール磨き」「ミッチー（私の愛称）走れ！」「体育教官室にある先生の机上に山と積まれた書類」と。伝統あるバスケットボールに始まりバスケに終わったと言っても過言ではない。前日の練習に疲れている時に、「休講」と聞けば急に元気になり、練習時間を早くするため、ＢＯＸで「早弁」（早く弁当を食べること）お昼休みには手の皮が何枚もはがれ血が出るくらいに素手で水をつけてのボール磨き、クリー

ナーなど見たこともなかった。厳しい練習に「サボるな！」「走れ！」と先輩、コーチの声、サボれば私を目がけてボールや箒が飛んでくる。すかさずよける。こんなに苦しいのに次の日も又、体育館でボールを追っている。

現在は、華道教授、茶道講師として日々過ごしているが、高校時代に鍛えた、精神力が今、役だっているのかもしれない。華道、茶道というと「静」のイメージが強いが、いたって体育会系であり、展覧会や舞台上の生け花等は、大きな木や器、バケツの水、剣山等と大変な力仕事と集中力が必要な仕事である。社中の中にも山城卒と聞くと親近感を感じ、うれしいものである。バスケットボールやサッカーの指導をしながら多忙な日々を過ごされていた細川磐先生や森貞男先生、そしてお世話になった大西匡哉先生共に現在もお元気で、大変ご活躍されていることはうれしい限りです。こうして書き始めると、自由な高校生活で本当に勉強していたのだろうかと。しかし、すばらしい青春時代は山城ならでは味わうことができたのだと思う。母校を思い、友一人一人の顔を思い出し懐かしい。

山城高校開校百年、新校舎完成と新たなる山城高校の出発として、生徒諸君は大きな社会の星として輝いてほしいと念じます。